

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】土屋 耕治

【所属】(助成決定時) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

【研究題目】社会の過去と未来に関する展望とその規定要因—日・中・豪の文化差に注目した検討—

【研究の目的】

“私たちの社会は、過去にどのようなものであり、これから先はどうなっていくのであろうか？” 私たちは、このような自らの社会の過去と未来の展望を持つことが報告されており、その認識には、歴史的・文化的背景が大きく影響を与えていると想定されている。しかし、これまでの社会変化の素朴理論に注目した報告は、欧米文化を背景に持つオーストラリアのもののみで、歴史背景・文化背景の異なる国における結果は、まだ報告されていない。近代化を早期に遂げた欧米諸国と比較し、アジア文化圏は社会変化の可能性を多く持っていることから、未来の展望が欧米と異なると考えられ、その報告が待たれている現状だと言えよう。そこで、本研究は、日本・中国・オーストラリアの三国においてデータを収集して比較検討することで、社会の過去と未来の展望とその規定要因の文化的共通項と差異を明らかにすることを目的とした。

【研究の内容・方法】

本研究では、社会の過去と未来に関する展望とその規定要因を探るため、日本・中国・オーストラリアの三国において、大学生を対象とした質問紙調査を実施した。具体的には、大学生 320 名 (男性 111 名, 女性 209 名, 平均年齢 21.55 歳; オーストラリア 100 名, 中国 126 名, 日本 94 名) が調査に参加した。本研究で検討した点は以下の 2 つの点であった。

第一は、過去・未来の展望に関する全体的特徴とその文化差に注目した検討である。具体的には、集団の特徴を捉える軸として報告されている“温かさ (warmth)”“有能さ (competence)”の 2 側面 (e.g., Fiske et al., 2006) から、100 年前, 20 年前, 20 年後, 100 年後の社会に関する回答を得た。欧米文化に対して行われたこれまでの研究では、人々が“伝統的な共同体社会から近代的な社会への変化していく”という認識を持ち、過去から未来へと時代を経る中で、温かさが減少し、有能さが増加すると認識していることが報告されている。この傾向は近代社会変化の特徴であるとの認識もあることから、文化間でその傾向に大きな違いは見られないと予測されるが、対人関係がより相互依存的な社会であるアジア文化においては、欧米文化と比べ温かさの減少がより見られると予測された。

第二は、展望を規定する要因と文化に注目した検討である。これまでの研究で、社会の展望に人間関係行動の変化への認識が、影響を与えることが報告されてきた。具体的には、温かさの変化には、共同体的人間関係の変化 (communal sharing) が、そして、有能さの変化には、市場原理的判断の変化 (market pricing) が影響を与えていることが報告されている (e.g., Kashima et al., 2009)。本研究では、異なる文化・歴史的背景を持つ人々を比較できることから、各社会で異なると考えられる、自らの社会の活力の認識 (vitality) を新たに加え、これらが展望に与える影響を検討する。具体的には、文化が、社会の持つ活力と、共同体的人間関係・市場原理的判断の変化に影響を与えることを通して過去と未来の展望へ影響を与える過程を検討した。

【結論・考察】

調査内容の分析結果から、以下の点が明らかになった。

第一は、三国の全体的特徴とその文化差である。三国の傾向は、中国と、日本・オーストラリアの間に顕著な違いが見られた。日本は、これまでオーストラリアで確認されていた「社会は、温かさが減少し、有能さが増加する」という傾向を持ち、将来に関してもそのような傾向が見られたのに対し、中国では、100 年後の未来に、倫理 (温かさ) の水準は保たれながら、経済 (有能さ) は著しく上昇する、という見通しが持たれていた。

第二は、これらの特徴を規定する要因である。三国間で見られた展望の差異を規定する要因を分析した結果、自らの社会の持つ活力の高さや社会の変化可能性に対する認識が影響を与えている可能性が示唆された。

本研究から得られた知見から、心理特性がアジアと欧米という文化圏で対比されることが多い中、国の個体差を検討していく必要があること、また、一般市民の社会の過去と未来に対する見方は、自国の経済発展の様子や社会の変化可能性に関する認識から影響を受けている可能性が示唆された。